



山陽スピリット ニュース No.21

2020(令和2)年9月16日

発行：学校法人 山陽学園 広報・山陽スピリット推進室

コロナ禍で考えたこと

学校法人 山陽学園理事長

渡 邊 雅 浩

新型コロナウイルスの蔓延により全世界が震撼している。まさにパンデミックである。ワクチンによる予防も発症後の特効薬もないという恐ろしい事態だ。

学生時代に読んだカミュの『ペスト』を再読した。アルジェリアの地方都市オランでペストが発生し毎日多くの死者が出て、街が封鎖され人びとの日々の暮らしは疲弊していた。車内で乗客は背を向け合い伝染を避けていたとか、夏の海水浴が禁止されるなど、テレワークが奨励され各種のイベントが中止されるわが国の状況と同じである。

自粛という蟄居生活のなかで頭を過^{よぎ}ったことの一部を述べてみたい。

蔓延の拡大は、発生後の初期対応に問題があったのではないかと考えている。人間の生命に係わる病気の蔓延に対する危機管理のあり方が露呈したように思われる。人命に係わる重大な問題を、政治的メンツのために恣意的にコントロールすることは許されない。

巷ではマスクが入手できなくなった。由々しき事態である。これはIT、AIなどの先端技術ばかりを奨励する現代の産業政策の負の局面であろう。マスクなどは、労働力の安い国に任せ、輸入すればいいという安易な考え方である。新自由主義経済ではそのような流れになるのかも知れないが、国民の生活を守らなければならない政治では済まされないことだ。

これは国の安全保障の問題につながると思う。食

糧についても、自給率の低いわが国では、一旦想定外の重大なことが発生するとマスクと同様食糧不足の問題が生じる心配がある。先のアジア太平洋戦争において、わが国が石油の輸入ルートを断たれたことを考えても、国の安全保障は軍備だけではないことを認識しなければならない。

政府のコロナへの対応の遅れやチグハグな点が指摘されているなかで、わが国の感染者や死者の数が諸外国と比べ比較的少なかったことは日本人の民度の高さによるものだと、ある政治家が言っていたが、緊急事態宣言が解除されると第2波ともいえるほど感染者が増えている。お上のタガが外れると自粛意識は曖昧になってしまうのか。この現象はある種の圧力(要請)に安易に同調してしまい、そのようなものがなければ自律できないという日本人気質の表われではないだろうか。

コロナ禍は、人権に係わる事態にもなっている。ウイルスに感染した人や家族、さらには感染リスク下で献身的に活動している医療従事者にまで非難や嫌がらせが及び、忌避されているという。

自粛しなければならないとされていることを無視して行動したという曖昧な根拠だけでSNSなどでデッチあげ、差別的な言動により個人の尊厳をないがしろにするようなことが生じている。不幸にして感染した人を、たとえその行動に過失があったとしても、そのことをあげつらい、非難してみてもコロナ蔓延の予防や解決にはならない。まずは治療や防止策を実施することが肝要であるはずだ。ハンセン病の元患者や家族への偏見や差別と同じようなことである。

ハンセン病といえば、山陽学園には、国の隔離政策による差別が否定されるずっと以前から、高い関心と入所者へ寄り添う姿勢があった。

ハンセン病は、当時恐ろしい病気とされていたな



長島愛生園に植樹したオリーブの木

かで上代淑校長は、社会から隔離された生活を余儀なくされているハンセン病療養所長島愛生園の少女たちに心を痛み、1936 (昭和11) 年10月、創立50周年記念事業の一環として山陽高女寮を寄贈した。落成式には校長をはじめ生徒、教職員、同窓会の有志170人が参列した。私は、80年も前偏見や差別意識の強かった時代に、このような人道精神に基づく確固たる行動がなされたことに敬嘆している。2006 (平成18) 年8月には、山陽学園120周年を記念して愛生園でオリーブの木2本を植樹した。植樹式には学園関係者、生徒、愛生園関係者など約100人が参加。植樹に先立ち中学・高校放送部が制作した「あの日から70年、山陽学園と長島愛生園」を上映した。現在でも生徒たちは、愛生園を訪問し入所者との交流を続けているし、ハンセン病療養所の世界遺産登録をめざすPR動画の制作にも関わっている。

コロナウイルス感染者に偏見や差別意識による嫌がらせをするのではなく、人としての尊厳を大切にしたいものだ。

大学では入学式が中止になり正常な教育活動が妨げられている。教室で通常の授業ができないということは学校として致命的なことである。緊急避難ともいえる対応として、逸早くオンライン授業を実施した。はじめてのことなので教職員には大変なご苦労をかけたことになり、感謝を表したい。

オンライン授業は、知識を伝えるという意味では教室の授業と変わらないかも知れないが、教室では教師と学生との間にある種の緊張関係がある。教える側には直接学生の反応がわかり理解度を確認しながら進めることができる。

学生にとっても適度な緊張感が、学ぶ意欲を高めることになる。教師の全人格、高い教養に裏づけられた知識、目に見えない何か生氣のようなものなどを感じながら学ぶ意義は大きい。同じ空間で教師と学生が共に知的な関係性をもつことは、とても大事なことだと思う。教師の学生に教えたいという強い気持ち、情熱、意欲が直接伝われば、単なる知識だけでなく何らかの付加価値がついている。

山陽学園の教育の基盤を確立した上代淑の教育は、教科書で教科を教えるだけでなく社会生活をすすめるうえで人間としてのあるべき姿を伝えてきた。上代が教育者として優れていたのは、これらを示範により教えていたのであり、生徒たちは、それを聞き、見、真似て学んだのである。学生、生徒は、教室の内外で教師の平素の挙措を見て、感じて、身につけるものである。

時代も変わり現代の大学教育に、その教育手法をそのまま導入することにはならないかも知れないが、教室の授業にもそのような気持ち、姿勢は大事であると思う。

教育は、いくら情報化が進展しても教える者と教わる者の生身の知的で精神的な接触が大事だということに改めて感じた。

『ペスト』では、治療としての血清注射の効果は定かでないが、終息したようである。新型コロナもそのような終息を願いたい。

コロナ禍は新自由主義経済の奔流に翻弄される社会という“バベルの塔”への神の怒かも知れないと想っている。



マスクをして登校する中学・高校生